

2014年度 教師海外研修 研修報告書

派遣国：タンザニア

学校名：横浜市立共進中学校

担当：英語科

氏名：中村 悠里

1. 今回の研修における目的やねらい

国際理解教育に取り組むにあたって、自分自身が実際に経験して視野を広げることで、生徒に対しても説得力のある、伝えることのできる授業をつくっていきたいと考えた。タンザニアの生きた教材を使って、生徒が「違う国のこと」ではなく身近なことだと考えられるようなアプローチをすることで、彼らの目を世界に向けていくことができるのではないかと。また、開発途上国と呼ばれる国の今の姿を見ることで、何ができるのかを探り、自分自身にとっても国際貢献について考えるきっかけとしたい。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

研修中は毎日が新鮮なことばかりで、様々な場所や施設を回り、たくさんの出会いを経験することができた。特に、ZAWAの視察では専門家、現地スタッフをはじめ水を利用する顧客にも直接話を聞く機会を得た。このプロジェクトのために汗を流して働く人の姿と、それがどのように人々の生活に結びついているのかを実際に見ることができたのは貴重な経験であった。現地の人々の声を直接聞くことで、彼らを身近な存在として「自分には何ができるのか」という考えに自然に至ることができた。生徒には自分が経験したことそのままを伝え、先入観を持つことなく、生きたアフリカを感じてもらいたいと思っている。授業の素材としてタンザニアの今を様々な角度から伝えることで、生徒たちにとって効果的な授業づくりを目指していききたい。研修を通して得たものをしっかりとまとめて臨んでいききたいと思う。

3. タンザニアから学んだこと

タンザニアは多民族国家でありながら、お互いの文化を認め合って共存している。それはニエレレ大統領の施策がもたらした個人的なつながりを大切にした結果であるという。今回の研修を通して、様々な経験をさせてもらったが、どの場面でも必ず一人ひとりの持つ力を感じた。また、タンザニアで働く専門家や協力隊の姿を見て、国を越えて働くことの意味を考えさせられた。支援ではなく協力であるという、長期的なスパンでタンザニアを支え自立させようとする姿勢や、それに合わせて一緒に働いているタンザニアの人々。同じ目標を持って共に働く姿を心強く感じた。同時に発展途上であるがための治安悪化や人材不足の問題など、乗り越えなければならない課題は多いが、タンザニアの人々と直接つながりを持ってたことで、この国に関して興味を持って支援していきたいと感じる。教育活動を通して、少しでも多くの人にタンザニアでの経験を伝え、現状を知ってもらうことが将来へつながる一歩になるのではないかと。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

今回の研修では、ZAWAやTANESCOのプロジェクト視察の機会があった。日本に住む生徒にとってアフリカは遠い国かもしれないが、普段使っている水や電気をテーマにすることで自分たちの生活との比較がしやすいのではないかと。違いを「知る」ことから、自分たちがしなければならないことと、今できることの違いを実感させ、自発的な行動を考えさせることにつなげていきたい。そのためには、自分自身の経験を出来る限り共有していくことが重要である。今回の経験の中でも特に実感させたいのは「人の力」である。プロジェクトを支える個人の力に焦点をあて、現地スタッフと日本人が協力して取り組んでいる様子、その苦労や悩みなど、視察を通して得ることのできた情報から生徒が

ストレートに感じることを引き出していききたい。タンザニアという一つの国を通して「知る」ことにより、自分だったらどうするか「考えさせる」ことで国際理解教育につなげていきたいと思う。また、生徒自身の自分に何ができるのかという考えを引き出し、国際協力への興味を持たせることで「行動する」生徒、世界に貢献できる人材を一人でも多く育てたいと考える。また、研修では英語とスワヒリ語で話をする場面が多かった。教科の視点から、コミュニケーションを広げるツールとしての英語を意識させ、世界の人々と交流する機会が持てるとよいと思う。そこから言語を学ぶことの重要性を再認識させ、言葉を通してつながることの喜びを実感させたい。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

一番の収穫は実際の現場を肌で感じる事ができた感触である。教科書からだけでは知りえないタンザニアという国の生の姿から、生きた教材作りのヒントをあらゆる場面で見つけることができた。特に同年代の子どもの生活というのは生徒にとって興味を持ちやすい切り口であるため、今回のように学校での交流があると帰国後の授業に活かしやすいと思う。また、ザンジバルでのホームステイでは実際にその土地に生活する家族と過ごし、異なる文化に身を置くことでしか分からない気づきを多く得ることができた。現地の交流、文化理解を含めて非常に有効な手段である。自分自身の反省であるが、学ぶことが多くその日の終わりにしか振り返りができないので、訪問先のどこに視点をおいて臨むのか、あるいは帰国後の授業の展望など、目線を先に向けて少しずつでも共有していけるとよかったのではないかと感じた。

6. 海外研修での役割（各担当や日直）を振り返っての感想・提案など

各担当が現地の協力隊や専門家の方と密に連絡を取り合っ、事前に情報共有をしてくれたことで研修中の時間を有効に使うことができた。訪問先では直接質問する機会も多く、予めある程度の知識や自分の考えをまとめておくことが必要だと感じた。自分の勉強不足から技術的に理解しにくい場面があり、活動の苦労や全体像を掴むことができないことを不甲斐なく思う場面も多かった。また、今回は特に大きなトラブルはなかったが、その場その時で何が起るか予想できないので、臨機応変に動く力が求められると思った。

7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

研修中の限られた時間の中で、専門家、現地スタッフ、協力隊などたくさんの方々から話を聞く機会があり、タンザニアという国を多方面から知ることができた。スケジュール調整をして、内容を濃いものにしてくださった JICA の調整員の方々をはじめ、本研修に関わった全ての人に感謝したい。

8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

研修中は毎日が充実し過ぎていて、一日ごとの研修でインプットされる情報や自分の考えをまとめることに苦労した。時間が経って記憶が薄れてしまっはもったいないので、話を聞いたことはとにかくメモに残し、空いている時間に整理していくとよいと思った。また、現地で作業をする時間は取れないので、研修に集中するためにも日本でできる準備はすべて行って臨むことが大切である。交流など予定の変更は当然起こりうる事態であり、色々な人にアドバイスをされたように、第二案、三案と用意しておくことも必要だ。限られた時間を最大限に利用するためには、事前の準備にかかっていると実感した。また、各訪問先ではどのような点に注目して見るべきなのか、自分でポイントを絞って研修に臨むことで、さらに充実したものになると感じた。

9. 各訪問先等の所感

日 時	テーマ	所 感
8月11日(月) -12日(火)	日本からタンザニアまでの 移動中および現地到着	ダルエスサラームの空港へ降り立ったとき、高く 見えた空が印象に残った。バスが止まるたびにた くさんの物売りが寄ってくる。愛想のよい彼らと 決して裕福そうには見えない身なりとのギャップ に少しとまどったが、同時に人の持つエネルギー を感じた。窓から垣間見える人々の暮らしは、高 いビルや交通渋滞など思ったより都会的であっ た。
8月12日(火)	JICA タンザニア事務所表敬 研修ブリーフィング	大西所長より講話をいただく。タンザニアのめざ ましい発展には国民ですらとまどっており、治安 の悪化や交通渋滞にもつながっている。そのよう な状況の中で子ども達はどのような目で自国を見 ているのか。「将来の夢はない」と答えるという彼 らの生の現状を知りたいと思った。また、大森所 員より健康管理上の注意を受け、日本の安全さを 改めて感じると共に身が引き締まる思いであっ た。
8月12日(火)	本日の振り返り	タンザニアに到着してからの感想等を共有する。
8月13日(水)	JICA タンザニア事務所 研修ブリーフィング	友成次長より政治、地政学、経済と様々な角度か ら見たタンザニアについての講話をいただく。イン フラ事業にJICAが大きく関わっていることを学 ぶ。また、ZAWA 事業の課題と現状について大林所 員より説明を受ける。このプロジェクトに最前線 で関わる専門家の思いを直接聞いてみたい。「今の アフリカを肌で感じる」ため、この研修の間に何 ができるのか、目で見たり経験したことを全 て吸収して持ち帰りたいと思った。
8月13日(水)	ザンジバルへ移動	ザンジバル到着時、フェリーの窓から見える街の 雰囲気はイスラム圏に来たのだと実感する。ホテル 近くは観光地化されており、外国人観光客の姿 も多く見かけた。電気や水などのインフラ事情が 気になった。また、ザンジバルでは手に入りづら いという食パンを大量に運んでいる人を見掛けた。 (食文化の違いだろうか)
8月13日(木)	隊員との懇談会	協力隊に応募した経緯や以前の職業、実際の訓練 生活など、隊員の方々から生きた情報を得ること ができた。気になる水事情だが、水汲みをして生 活をする隊員もいれば、問題なく使えるという隊 員もいて同じザンジバルでも派遣先によって違う という情報を得た。
8月13日(水)	本日の振り返り	ムナジモジャ病院の視察に向けて情報共有

8月14日(木)	ムナジモジャ病院 沢谷隊員 活動視察	入院病棟では折り紙を渡して子どもと接することができた。足が動かさない子どもが風船の折り紙で遊ぼうとする姿が健気であった。同じベッドで生活するように過ごす母親たちが印象的であったが、看護師の不足などから保護者が面倒を見なければならない状況下にあるとのこと。院長先生のお話でも人手不足は深刻な問題として挙げられていたが、協力隊やデンマークのボランティアに頼り続ける状況に疑問を感じる。養成学校はあるが、給料が3倍ほど高い都市部へ人材が流れてしまうようで、単純には解決できない事情があるようだ。沢谷隊員曰く「日本とやっていることは同じ」という活動だが、不安そうな保護者への声掛けや同僚とのまめな情報共有のやりとりなど、沢谷隊員自身が「子どもの親に治療に関して興味を持ってもらうために」行う仕事ぶりに個人の力を実感する。
8月14日(木)	専門家との懇談会	崎山専門家の自分にも人にも厳しい姿勢にプロジェクトに対する真剣な思いを感じた。
8月14日(木)	ザンジバル水公社 (ZAWA) プロジェクトサイト視察	水はどのようにして末端の家庭に届いているのだろうか。水源である湧水地を実際に見るという体験は貴重であった。水質の安全性を保つために水圧を高くしているという配水地や周辺設備を見学しながら、専門家の方から話を聞く機会があった。「24時間給水」のためには汚水混入など課題が多いとのこと。マンパワーが必要だという専門家の言葉が印象に残った。
8月14日(木)	本日の振り返り	14日午後のZAWAサイト視察に関して、気がついたこと等の共有
8月15日(金)	ザンジバル水公社 (ZAWA) プロジェクトサイト視察	給水区域で水を実際に利用している顧客に直接インタビューをする。ZAWAの給水システムで「特に生活は変わらない」と「大変ありがたい」という対極の二家庭であったが、その背景には昔から近所で水を分け合う習慣があったことや、給水時間が一日に2回、3時間程度に限定されていることがあるようだ。また、WATER KIOSKで働く人によると、給水システムの整備に伴い、利用者が減っているとのこと。現在はホテルに水を売って生計を立てているタンカーの利用も多く見掛けたが、今後このような職はなくなってしまうのだろうか。安定的な給水のために専門家とスタッフがどのように取り組んでいるのか、ZAWAプロジェクト視察を通して、JICAの取り組む事業が人々の生活と直

		接つながっていくプロセスを学ぶことができた。
8月15日(金)	ホームステイ先との交流	ホームステイ先の Mussa さんのお宅では、日本の生徒の写真を興味深そうに見てくれたことが嬉しかった。子供は5人いたが、上の歳の子たちとは英語でコミュニケーションを取ることができ、父である Mussa さん曰く「将来世界に出たときに言葉で壁ができないように英語がしっかり勉強できる学校へ行かせている」とのこと。教育に関して、家庭環境や親の意識による格差が大きいと学んだが、Mussa さんのグローバルな考え方と広い視野は ZAWA での JICA とのつながりが関係しているのだろうか。子どもの教育を語る姿に説得力があった。
8月16日(土)	ホームステイ先との交流	朝5:30頃コーランの音で目が覚める。子どもたちは朝の仕事だという皿洗いや掃き掃除を始めていた。セカンダリースクールに通う Neema に英語の教科書を見せてもらい、日本よりコミュニケーション的な内容であることを確認する。植物の名前が多く登場していた。彼女は言語を学ぶことが好きだそうでびっしりと書き込まれたアラビア語のノートに感心した。ホームステイを通して感じたのは、「環境は人をつくる」ということである。Mussa さん夫妻の家族に対する愛情を至る所で感じ、文化や習慣が違っていても、一緒に過ごす時間はとても居心地がよかった。アイスクリームを買いに行ったことやホラー映画をみんなで見たことなど日常を共有できたことで、短い間でも家族の一員になれた気がした。Mussa さん一家の心遣いが本当に有難く、忘れ得ない貴重な経験となった。
8月16日(土)	教材購入	14日午後にホテル近くの書店でカンガについての本を購入。カンガのメッセージが着る人自身の表現になるとは面白い文化である。スワヒリ語の勉強という意味も込めて、研究しようと思う。
8月16日(土)	本日の振り返り	15日午後の ZAWA のサイト視察での感想とホームステイ先で経験したことの情報共有。
8月17日(日)	ダルエスサラームへ移動	フェリーで移動。船酔いで苦しんでいる現地の人を見かける。都市部に出稼ぎに行くためなのか、行きよりも若者(青年)が多いような気がする。荒い波の間にダウ船を何艘も見た。目的地まで無事に辿り着けるのだろうか。大きなタンカー船とダウ船が並んで港に泊まっているのは不思議な光景であった。
8月17日(日)	モロゴロへ移動	バスに乗って5時間ほど移動。ダルエスサラーム

		の都会的な風景から赤土の中の本の道路に変わっていく。家並みも茅葺屋根や土で作ったものなど素朴な外見から暮らす人々の生活を垣間見ることができ、非常に興味深かった。棒で立てたゴールを使ってサッカーをしている子どもが多く見られた。重い荷物を運ぶ人は男性も女性も頭に乘せている。
8月17日(日)	隊員との懇親会	ムグラシ中等学校の赤堀隊員から、タンザニアの学校事情について話を伺う。体罰について、日常的に行われていることとその理由について情報を得る。
8月17日(日)	本日の振り返り	翌日に控えたキラカラ中等学校での交流に向けた話し合いをする。
8月18日(月)	キラカラ中等学校 稲村隊員 活動視察	タビタ校長先生は来日された経験もあり、教育活動に熱心な印象を受けた。校内見学をさせてもらったが、実験室やPC室などの施設は日本のものと大差なかった。生徒たちは昼食(ピーナッツなど)を買ったり野菜洗いの手伝いをしたり、いきいきとした表情で過ごしていた。政府認定のスーパースクールかつ国家試験に向けての大切な試験日だということで、どのような交流ができるのか緊張していたが、冗談に笑ったりカメラに写りたがったり、日本の女子校と変わらない反応に安心した部分があった。グループに分かれての交流では、より近い距離で話しができた。全ての生徒が英語を話し、何人かは日本から持ってきた写真を見て「行ってみたい」と言ってくれた。宇宙飛行士や薬剤師や会計士になりたいという彼らの将来を楽しみに思う気持ちと厳しいタンザニアの教育システムを乗り越え、無事に職に就けるのだろうかという気持ちが入り混じる。ふとタンザニアでは女性の台頭がめざましいという講義の中の話思い出した。交流の最後に、生徒たちが歌ってくれた日本の歌に胸が熱くなった。この日のために準備、調整をしてくださった稲村隊員のおかげで、有意義な時間を過ごすことができた。
8月18日(月)	ダルエスサラームへ移動	モロゴロ付近では市場での様子を興味深く観察する。
8月18日(月)	本日の振り返り	キラカラ中等学校での交流についての感想、情報共有をする。
8月19日(火)	タンザニア電力供給公社 (TANESCO) プロジェクトサイト視察	TANESCOの研修施設を視察。タンザニア全土から集められているという研修生の実習の様子を見せてもらう。クラス分けは出身地がうまく混ざるよう

		<p>に考慮しているようだ。日本の国旗をあらゆる設備や備品に見ることができた。TANESCO が出している修了証書を外部に通用するように、将来的には国際的な施設にしたいというビジョンを持って取り組んでいるという。専門家の長坂さんの話から「mamoja」を合言葉にしたチームワークや、一方的に教えるのではなく対等な立場で学んでいく姿勢を大切にしていることから、人材育成だけではなく現場での成果の実現、雇用を生み出すことでタンザニア国の発展につなげていこうという共通した思いを感じることができた。研修生に対するシステムをゼロから作り上げたという専門家の苦労、特に後援者がなかなか来なかったために一人で奮闘し続けた小田桐専門家の話が印象に残る。どのような思いでプロジェクトに携わってきたのか。軌道に乗った現在の TTS の姿をどのように見ているのだろうかを考える。</p>
8月19日(火)	教材等購入	<p>ティンガティンガ村とショッピングモールで教材になりそうなものを探す。導入で活用できそうな楽器類と衣類を購入する。スワヒリ語のタンザニア地図は扱っていないとのこと。</p>
8月19日(火)	本日の振り返り	<p>購入したものについて情報共有と研修を振り返って意見交換。</p>
8月20日(水)	JICA タンザニア事務所 報告会	<p>友成次長より「アフリカの今と未来に興味、関心を持たせる授業をしてほしい」という言葉があったが、研修中に会った人々、見た風景すべてが新鮮で自分自身にとっても非常によい刺激になったと改めて感じる。タンザニアを動かしているのは一人ひとりが持ったエネルギーなのではないかと思えるほど、魅力的な出会いであった。気配りの仕方を例にして、根本的な気質が日本人と似ているのではないかという意見も挙げた。発展途上国と言われながらも豊かに見える人々に、私たちの考える貧困や幸せとは何であろうと疑問を持つ。</p>
8月20日(水)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	<p>岡田大使よりタンザニアと日本の関係について、JICA の活動を交えての説明を受ける。現地視察に足を運び、民間企業との連携に自ら率先して動いているという大使から「タンザニアの人を知ってほしい」と生徒へのメッセージをもらう。色々な人と個人的に接することで、その国への偏見がなくなるという考え方や、ネットを通じて子ども達同士で交流できればよいと授業のアイディアを頂</p>

		<p>く。個人個人のつながりから全体の幸せにつながっていくということ、タンザニアの人がどのような発展をしていきたいかを考えながら支援をしていくということなど日本の大使として、国同士だけでなく個人のつながりを大切にされている印象を受けた。大使の多岐に渡る知識の豊富さと私たちの話に耳を傾けてくれる姿勢に感銘を受ける。質問すべてに丁寧に答えてくださり、このような機会を光栄に思う。</p>
8月20日(水) -21日(木)	タンザニアから日本までの 移動中および日本到着	<p>ドーハへ向かう飛行機からザンジバル島が見え、感慨深かった。途中キリマンジャロも見えた。タンザニアでの9日間を思い出しながらの帰路だったためか日本まであっという間だった。</p>